



自己表現力開発

自他理解を促し、
かかわりあう楽しさの体感を図る活動



石井 信孝



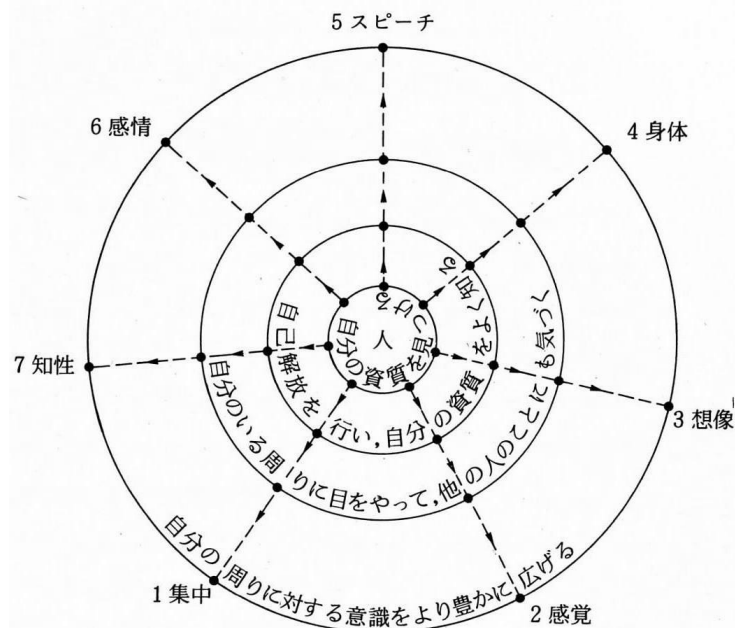
I 自己表現力開発とは ※ 単なる表現技術の推奨ではない。

集団の中で仲間とともに自己を発揮する子どもの育成
調和的発達の促進

本校の教育実践の大きな柱は、「授業集団づくり」と「自己表現力の開発」である。この二つは、集団と個に着目し、「連帯する個」の育成を図るものである。連帯する個とは、質の高い集団の中で仲間とともに磨きあい、自己を発揮する個である。

本校において、「授業集団づくり」と「自己表現力開発」の研究・実践を進めるようになったのは、昭和40年代のことである。集団づくりに着目して教育実践を重ねる中で、「自己表現力開発」が着目され、統一的に発展してきたのである。「授業集団づくり」の取り組みは、教科学習と生活指導を融合させて人格の形成を図るものである。集団の在り方の研究が進む中で、集団の形成者としての個人の在り方が問われるようになったのである。そして、そこで着目したのが「自己表現力の開発」である。

「自己表現力開発」の考え方の基盤になっているのがイギリスの演劇教育者ブライアン・ウェイの「ドラマ」の考えである。ここでいうドラマとは、言語や身体などを含めた



(ブライアン・ウェイ著、岡田陽・高橋美智訳『ドラマによる表現教育』)

図 - 1 人格の七つの諸相

自分自身を表現の媒体とする表現活動のことである。観客に見せることを目的とした演劇とは異なる。ドラマによる表現教育とは、ある状況を体験的に生きることによって、真実を探り、理解すること、「なることによって学ぶ」(Learning by being) ことをめざしている教育である。ウェイの考えを参考にし、全人格にかかわる資質の開発・伸長、調和的発達をめざしたのである。自己表現力を開発していくことは、人格の七つの諸相(図-1)を発展させ、<かんじる><あらわす><ふかめる>という3つの視点から次のような資質を育てていくことであると考えている。

<かんじる>

物事に集中し、五感を働かせて深く感じ、豊かな想像力を働かせてとらえる。

<あらわす>

周りに対して心を開き、感情を込め表情豊かに思いや考えを出し、それを共感的に理解する。

<ふかめる>

自分をコントロールし、自他の関連を正しくとらえる。

Ⅱ 自己表現力開発の取り組みの概要

自己表現力開発の取り組みについて、1984年出版の本校の書籍「豊かな自己表現力を育てる」より抜粋してその概要を記載する。

1 バランスのとれた能力の発達の必要性

○自己表現力伸長による感情をコントロールする力の育成

子どもが自分の考えや感情を自分の言葉や体で自由にあらわすことに自信を持てるようにすることが大切である。なぜなら、あらわすことに対する自信とは、自分の感情を自分でコントロールできているということである。

自信をもって「あらわす」ことには、同時に他人の表現を喜んでしっかり受け止めることを含むコミュニケーションに外ならない。

2 ドラマの考えを生かした自己表現力開発

(1) ドラマのとらえ方

ジェラルディン・ブレイン・シックス(1912-2005) <教育におけるドラマの目的>

「子ども達の心を開き、想像力や言語能力を刺激し、人間的成長をうながし、発見に対する熱意をたえずかきたてることである」

ブライアン・ウェイ(1923-2006) <ドラマの役割>

『想像力を刺激し、実際に経験させる』ことによって『直接経験に訴え、知的理解を超えて心と魂にふれる』ことで、ドラマを始めるということは、『各人が持っている資質を発見し、開発することを助けること』であると述べ、ドラマと演劇とは区別して考えている。」

「自分の考えや思いを表現していく過程の中に、生まれながらに持っている身体の諸
ワークショップ 自己表現力開発 2

機能をフルに活用し、豊かに“かんじ”てとらえ、それをのびのびと“あらわす”ことにより、他の者と積極的にかかわり、自分を見つめ、とらえ直し、“ふかめる”活動であって、表現する体験そのものに意味をもっている。」

(2) ドラマの考えを生かした自己表現力の開発

自己表現力の開発…子ども達の資質の開発をめざしている

ウェイは、人間の成長を、同心円の調和的拡大と捉えている。人格の諸相を七つ（図-1）とし（集中・感覚・想像・身体・スピーチ・感情・知性）、それぞれが発達する可能性を持っていて、訓練により拡大するし、放っておけば、逆に後戻りもありえるとしている。

(3) 自己表現力開発の活動

ウェイの七つの諸相を磨く活動を行うこと。

※ 七つの諸相には、軽重・順序などなく、一つの具体的な活動は様々な相がかかわり合っていて、分化が不可能だが、活動のねらいを焦点化しながら相を磨いていくということから、あえて三つにグルーピングしている。

- ㊸ 気持ち・イメージづくり（主として、集中・感覚・想像）
- ㊹ 身体・言語表現（主として、身体・スピーチ）
- ㊺ 総合的表現活動（集中・感覚・想像・身体・スピーチ・感情・知性）

㊸ 気持ち・イメージづくり（主として、集中・感覚・想像）

人間が自分を外に出そうとする場合、必ず内面に生まれるものであり、集中して深く感じたり、のびのびと思い描いたりする活動内容である。

<集中>…それ自体の活動ではなく、感覚など他の活動を通して表れるもので、人格の諸相のすべての底に集中する力がかかわり、支えている。

<感覚>…五感を使って外界を知覚することであり、五感は、外のものを自分の中に取り入れる窓口となっている。五感を必要に応じて鋭く使えることが、体を通してより深く物事を理解することにつながる。

<想像>…現実をもとにしながら現実を超える、いわば、未来への橋わたしの役目をし、他人への結びつきや学習の様々な面に生きていく。

気持ち・イメージづくりの活動は、子どもの内面を耕し、豊かにしようとするもので、諸相の全てにかかわって深められる。

④ 身体・言語表現 (主として、身体・スピーチ)

自己の内面を体全体を使って表現したり、言語を使って表現したりする活動である。この活動は、表すことと共に、コミュニケーションも促し、他とのかかわりを深める働きもする。

<身体>…身体を様々に動かして、自分の身体の各部分の新しい動きや働きに気づかせる。そして、動きを通して自分の身体をコントロールさせると共に、感情のコントロールをも図らせる。また、想像や感覚と関連させ、心に描くもの深く感じるものを新しい自分の動きとしてつくらせる。

<スピーチ>…心と言葉を即興でつなぎ、表現するものである。話すことにより心が開放されたり、思考が明確になったり深まったりする。それと共にスピーチの働きは、聞き手とも結びつき、コミュニケーションを促す。

スピーチでは、正しく話すとか上手に話すとかの前に、声を出すことそのものを大切にする。そして、自分の考えや感情など、内にあるものを自分の言葉で自信をもって表現することや、他人の話に耳を傾けて聴くこと、さらには、他と対応させながら話すというように進めていくことが大切である。

身体・言語表現も、これだけで独立するものでなく、人格の諸相すべてにかかわり、支えられながら行われる活動である。

⑤ 総合的表現活動 (集中・感覚・想像・身体・スピーチ・感情・知性)

諸相を全部内包し磨いていく活動として三つ目のグループとしてまとめた。ここでは、基礎的なものを総合的に働かせながら、劇あそびや劇づくりの活動を行い、各要素が関連し合った形をとりつつ、自己を表現させるのである。

<感情>…外から入ってきたものに対する内面の動きで、心でどう反応するかということである。ここでは、認識したものに見合う素直な感情をありのままに意識し、素直に表すことを育てていく。そして、自分の感情を外に表した行動に責任を持つことをめざし、その積み重ねにより感情のコントロールを図り、自分を制御し、他人に対する思いやりへと深めていく。

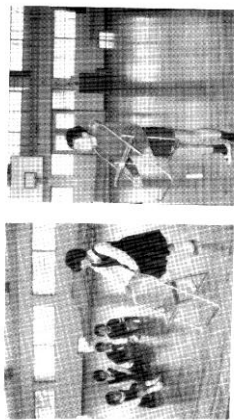
<知性>…そのものを練磨するというより、他の諸相の発展に伴って生まれ磨かれるものととらえられる。それぞれの相の充実により、知性の働きも確かなものになっていく。特に感情のコントロールと大きなかかわりをもつ。

III 活動例

広島大学附属三原小学校教育研究会「豊かな自己表現力を高めるためにⅠ」1980より

ジェスチャー遊び（想像）

- 1 **ねらい**
あるものをもとに想像し、何かに見立てて 物をつくることにより、想像力と身体表現の力を養う。
- 2 **指導の方法**
- ① みんなの前に椅子を一つ置く。
 - ② 椅子を何かに見立て、それを使って無言で動作をする。
 - ③ 何に見たてているか、他の者があてる。
 - ④ ひとつがあたると次の人が出て別の動作をするというように、次々と続けていく。
- 折りたたみ式の個人用椅子の例では、子どもたちは、次のようなものに見たてていった。
- ・うぼぐるま・スケート・鏡台・駅弁売り・勉強机・フィゴ・荷車……
- 3 **指導上の留意点**
最初は、みんなが考えを持つ時間をとる。そして、順番に出させていく。次第にフリーにし、考えが浮かんだ者から次々と出させるとよい。一度出たアイデアは二度と使わない。全体で幾つ出るか数えさせたり、グループ対抗すると意欲を湧かす。



乳母車と駅弁売り

材料については、身のまわりのものが手軽に使える。
例えば、バケツ、鉛筆入れ、ほうきなど。大きさ、形、材質などの変化をもたせるとよい。

広島大学附属三原小学校教育研究会「豊かな自己表現力を高めるためにⅡ」1983より

3 何て言ったのかな（集中・感覚）

- 1 **ねらい**
二人以上の者が、同時に発した声を聴きとらせ、何と言うことばを言ったのか想像させることにより、集中させ、感覚を鋭くさせる。
- 2 **準備物**
ひらがなを書いた紙（なくともよい）
- 3 **指導の方法と実際**
- ① 一人または数人、当てる者を前に出させて、後ろ向きにして耳をふさかせる。
 - ② 2～4音ぐらいで、一つの物の名前になるようなことばを考えさせる。
 - ③ ことばが決まると、グループごとに一音を受け持たせる。
 - ④ 当てる者は振り返って、グループごとに、同時に発せられた声を聴きとり、その音を組み合わせ何ていうことばか考えて言う。
- 「あゝわかった！」
- 4 **指導上の留意点**
- 声だけでなく、口のあけ方も集中して見るように気をつけさせる。
 - 4～5人のグループで一人が一言を受け持たせてもよい。
 - 低学年の場合、5音以上を同時に聴きとることは不可能であるので、多くても4音ぐらいまでにする。
 - ことばは、みんなが知っているものにさせる。



「あゝわかった！」

74 はだかの王様 (劇あそび)

1 ねらい

「はだかの王様」の一場面をもとに、グループで人物の性格を設定させ、動きやせりふを自由に考えてつくり、役になりきって表現できるようにさせる。

2 準備物

椅子

3 指導の方法と実際

- ① 「はだかの王様」の筋を簡単に話す。
- ② グループで場面を決めさせ、登場人物とその性格を設定した上で役割を決めさせる。
- ③ 大筋に沿って、即興的に動きやせりふを考えて表現させ、見せ合わせる。

(例1)

王様一すくぐ口車に乗ってその気になり、いばり屋の王様

大臣一まじめだが、人からは信用されたいと思い、うそを言う

役人一気が小さく、本当を言うにもうそを言うにも心を痛める

はた織り屋二人一ずうずうしく、うそをならべていく

王：もうそろそろできあがるころだと思いが、ちょっと見てまいれ。

(役人、「ははあ」と言って下がり、二人のところに行く)

役：あの、もうできたと思いが、ちょっと見せてもらいたい。

はた織り屋二人：これは。さあどうぞ。これでございます。美しくできあがっております。

役：(きょろきょろとさがしながら) ええと、どこじゃ。

はた織り屋二人：目の前であるでしょ。ごらんの通りほとんど仕上がっております。色や柄はいかがでしょうか。

役：う、うん。結構結構。王様に報告しておくぞ。(自信がなさそう)

(部屋から出て、しばらく頭をひねってから、とぼとぼと進む)

役：王様、行って参りました。すばらしい服ができております。

王：そうか。大臣、お前も見て参れ。(大臣、はた織りの部屋へ行く)

大：すばらしい服というのはどれじゃ。

はた織り二人：でございます。役に立たない人には見えないようになっています。いかがですか。

大：(困ったように) こ、これか。なんじゃ、その。ちょっと眼鏡をかけて。うーん。なかなかよくできてる。(王様の前に帰る)

(この後、服ができて、はた織りのおだてにのり、町へ出て行く。)

(例2)

王様一王らしくしたいが、自信がない王

大臣一王にはべこべこするが、はた織りにはえらそうにする

役人一いいかげんで、うそも平気で言う。

はた織り二人一金をもうけたいが、うそがばれるのを少し心配する。

(前略)

役：行って参りました。ええ、もうすばらしい服で、何とも言いようがありません。王様も、きっとお喜びになりますよ。

はた織り二人：できあがったので持って参りました。

王：どれじゃ。はよう見せてみい。

はた織り二人：(両手で物を支えるようにして、差し上げる)

王：何。これか。(はた織り、ぎくりとする。王、しばらくじっと見ながら) なるほど、美しい服じゃ。気に入ったぞ。(小声)

はた織り二人：それでは、私たちはこれで。

王：ちょっと待て。(二人ぎくりとする) ほうびをとらそう。

(この後、服を着てしぶしぶ町へ行く。)



「すばらしい服ができました。」

4 指導上の留意点

- 新聞紙で簡単な衣裳を作らせてもよい。
- できれば、自分と違った性格の人物になり、その言動を体験させる。

IV Drama in Education に関して

Drama in Education とは何か

- (1) Drama in Education とは、子どもたちの想像力を働かせて、自分以外の状況に置いてみる能力、いろいろな、状況下で他の人と交流しながら考え、気持ちを表現する能力を育む。
- (2) Drama では、想像の中の状況や想像の中の人物とかかわり、それらを認識する能力を育む。

Drama, それはプロセスで、プロダクトではない

そのプロセスで

- ① 個性を育成する。
- ② 他の人に対する感情や配慮を育成する。
- ③ グループで行う仕事・作業へのかかわり方を学ぶ。
- ④ 自発性や臨機応変な態度を育成する。
- ⑤ 言葉の正しい使い方を学ぶ。
- ⑥ 行動を抑制する能力を育成する。
- ⑦ 同意した取り決めに対する責任感を育成する。
- ⑧ Dramatic な要素：

Tension, Climax, Conflict などを理解、活用することを学ぶ。

[小林志郎氏（前 有明教育芸術短期大学学長）のワークショップより]

V ドラマ教育の特徴的な4つの学習活動

- (1) グループによる学習活動
 - ・話し合う、演じ合う、観あう、評価し合う
 - ・集団の一員として自分を考える。 ⇒ 協調性
- (2) 想像・創造と選択のある活動
 - ・場面やストーリーを話し合い、選択
 - ・虚構の世界 ⇒ 学習への興味・意欲の促進
安全な世界での活動
 - ・自分たちが持っている情報や知識から選択し、組み立てる知的な活動
- (3) 疑似体験ができる活動
 - ・自分とは異なる人物になってみる ⇒ 子どもたち主導の学習
 - ・演じた人物がおかれている状況・役割の理解
- (4) 問題と向き合い解決に取り組む活動
 - ・別の問題の存在に気づく。
 - ・問題解決には多様なアプローチが可能であるということを知り、体験する。

<参考文献>

- ・広島大学附属三原学園編著
「幼小中一貫で育てる『かかわり力』～広島大学附属三原学園での12年間」 溪水社 2010
- ・広島大学附属三原小学校教育研究会「豊かな自己表現力を育てる」 明治図書 1984
- ・広島大学附属三原小学校教育研究会
「豊かな自己表現力を高めるためにⅠ」 広島大学附属三原小学校教育研究会 1980
- ・広島大学附属三原小学校教育研究会
「豊かな自己表現力を高めるためにⅡ」 広島大学附属三原小学校教育研究会 1983

<ドラマ教育などについて参考となる書籍>

- ・ブライアン・ウェイ 岡田陽/高橋美智 訳「ドラマによる表現教育」 玉川大学出版部 1977
- ・ジェラルディン・B・シックス 岡田陽/北原亮子 訳「子供のための劇教育」 玉川大学出版部 1978
- ・ジェラルディン・B・シックス 岡田陽/高橋孝一 訳「子供のための創造教育」
玉川大学出版部 1973
- ・片岡徳雄 編「劇表現を教育に生かす」 玉川大学出版部 1982
- ・岡田陽・清水俊夫 他「幼児・児童の創るシリーズ① 劇あそび」 玉川大学出版部 1981
- ・岡田陽・清水俊夫 他「幼児・児童の創るシリーズ② ことばあそび」 玉川大学出版部 1981
- ・岡田陽・清水俊夫 他「幼児・児童の創るシリーズ③ みぶりあそび ごっこあそび」
玉川大学出版部 1981
- ・佐野正之「教室にドラマを！」 晩成書房 1981
- ・岡田陽「子どもの表現活動」 玉川大学出版 1994
- ・小林由利子 他「ドラマ教育入門」 図書文化 2010
- ・小林由利子 編「やってみよう！アプライドドラマ 自他理解を深めるドラマ教育のすすめ」
図書文化社 2010
- ・田中博之「学級力が育つワークショップ学習のすすめ」 金子書房 2010
- ・中山夏織「ドラマ教育を探る 12 章」 NPO シアタープランニングネットワーク 2007
- ・中山夏織「ドラマ教育－倫理と展開」 NPO シアタープランニングネットワーク 2008
- ・レスリー・クリステン 吉田新一郎 訳「ドラマ・スキル 生きる力を引き出す」 新評論 2003
- ・デイヴィッド・ブース 中川吉晴他 訳「ストーリードラマ 教室で使えるドラマ教育実践ガイド」
新評論 2006
- ・日本劇作家協会「二時間からできる演劇授業用例集 ～自分と他者を発見していくプログラム～」
日本劇作家協会 2007
- ・絹川友梨「インプロゲーム 身体表現の即興ワークショップ」 晩成書房 2002
- ・高尾隆「インプロ教育：即興演劇は創造性を育てるか？」 フィルムアート社 2006
- ・渡部淳「教師 学びの演出家」 旬報社 2007
- ・福田三津夫「いちねんせい - ドラマの教室」 晩成書房 2005
- ・北川達也・平田オリザ「ニッポンには対話がない 学びとコミュニケーションの再生」 三省堂 2008